

設立 30 年記念 会員による思い出コメント（設立 ～ 現在）

①「イタリア同好会・高知設立 30 周年によせて」

小笹 智子

事務局の松岡さんが毎回発行して下さる「BUONGIORNO」を読み返しながら、イタリア同好会でのたくさんの出逢いを振り返ってみました。

2006 年に入会、同時にイタリア語初級勉強会へ参加。その頃のわたくしの語学力は、挨拶程度。そこからのスタートなので、不安でいっぱいでしたが、石川先生のとても優しく熱心な勉強会で、みなさんと一緒に楽しく学び、イタリアへの熱い思いが、どんどんと高まっていく事を実感していました。その後、何度もイタリアへ行ける事になるとは、その時は思ってもみませんでした。

定例会では、ワインを片手にイタリア料理を楽しみながらイタリア国歌斉唱や様々なジャンルの講演会、バスで大塚国際美術館へ遠出したり、芋掘り&バーベキュー、リュートの演奏会、イタリア大使との晩餐会、カフォスカリ大学留学生とよさこいや、しばてん踊りも楽しんだり。イタリア同好会を通じて、たくさんの出逢いを体感しています。

わたくしにとってイタリア同好会高知は、高知にいながらも、イタリアをいつも身近に感じられる存在。これからも、ずっとみなさんと素敵な出逢いを楽しんでいきたいと思っています。

② イタリア同好会・高知での思い出

2025 年 8 月 Toshi・森岡

1993 年 12 月に設立されたイタリア同好会・高知も 30 年以上が経過しました。

私はイタリアオペラとワインが大好きなことから、高知大学教育学部教授で声楽家の向原寛先生(故人)からお声をかけていただき、設立時から関わる事が出来た今では数少ない会員の一人です。

同好会は今まで色々な方のご協力とご支援で様々な企画がなされ、実行されてきました。

私はその全てに関わった訳ではありませんが、思い出深いことはたくさんあります。

そのことを以下に記してみたいと思います。何分過去のことですので、記憶違いをしている点があるかもしれませんが、その場合はご容赦ください。また長文ですが最後までお読みいただくと幸甚です。

イタリア旅行

イタリア旅行には 3 回参加しています。特に印象に残ったことを記します。

2000 年の旅行には家内も参加、ナポリから日帰りでカプリ島へも行きました。青の洞窟に入り、そしてアナカプリを散策。カプリ港へ帰るのに乗ったバスが狭い崖ぶちを走行するのでちょっと怖かった。シチリアのタオルミーナ。天気がとても良くて古代の野外劇場から見える海とエトナ山は絶景でした。その野外劇場の舞台上で歌ってみると音響がよく、観光客から拍手もあって、とても気持ちよかったです。

夜にはシチリアを一緒に回ったバスの運転手さんおすすめのレストランへ。そこは歌も聴かせてくれるレストランで、専属の男性歌手がいい声で歌っていました。なぜか私は日本人の歌手と思われていて(どうやら運転手さんがお店を予約した時にそう伝えていたようです。)、それでいつしかお店の歌手と私とで交互に演奏する歌合戦になってしまいました。最後には二人で、トスティのマーレ・キアーレと一緒に歌ったのですが、演奏が終わるやいなや、レストランのお客さんも店員さんも大喝采で、さらに店の窓の外で幾重にもなって見物していた人たちまでも大変な盛り上がりで、店を出るときには多数の人から声をかけられ握手を求められました。

一緒にレストランに行った中内光昭会長は「森岡君、これこそ本当の国際交流だよ！」と大変に喜んでくださったことを覚えています。



タオルミーナの古代野外劇場 私(中央)が歌っています 背景に海とエトナ山

2005年には娘と一緒に同行してくれました。この時は、まずはオーストリアのウィーンに寄ってからイタリアに行くという旅程でした。ただ日本を出発する時大きなトラブルがあって、参加者のお一人が間違えて期限切れのパスポートを持参されていて、成田空港まで来たのに出国できなくなりました。この時、旅行の団長的存在の宮地彌典さんが素晴らしい対応をされ、一日遅れでその方がウィーンに到着できるように色々で見事なほど素早く手配をされました。それだけではなく、翌日にはウィーン空港まで、その方を迎えにいかれ、皆さんと合流できるようにしてくださいました。宮地さんの対応には、ただただ感服するのみです。

娘と私はウィーンは初めてで、着いた翌朝から二人で市内を歩いて回りました。生憎の小雨が降る天気でしたが、電車に乗って旧市街を一周したり、1kmくらいにわたって続く長い市場などを歩きました。数か所のお店で日本の豆腐と思われるものが売られているのには驚いたことでした。

夜はウィーン国立歌劇場に行き、バレエの代表的演目「ジゼル」を鑑賞しました。テレビではよく見る劇場ですが、本当に建物、内部ともに素晴らしく、全部が芸術品です。バレエの出演者は踊りだけでなく、表情仕草が表現力に富んでいて、言葉はなくても内容が理解できました。またオケの音色が柔らかく美しかった。ウィーンフィルが演奏しているのだそうですが、やはり世界一流はすごい。

1幕はちゃんと鑑賞できたのですが、残念ながら時差ボケのせいで2幕に入ると睡魔に襲われ、よくは鑑賞できませんでした。また後で、翌日の公演は人気のオペラ「トスカ」だったことを知り、旅程が一日ずれていたらよかったのになあと、これまた残念でした。

イタリアではトスカーナで宿泊したヴィッラが素晴らしかったです。アンティノーリという元貴族が経営している施設で、全部スイートルームのような豪華さ広さがあり、内装も素敵でした。この施設は

事務局の松岡さんが確か何かの雑誌で見つけてくださり、石川啓子副会長がイタリアに予約を入れてくださったそうです。間違いなく5ツ星クラスの内容でした。お二人の手配に感謝感謝です。

この旅行では、ちょっと不愉快な後日談があります。

旅行の後、一緒に参加された当時高知医療センターのトップだった方が、病院の納入業者からの収賄容疑により、連日マスコミで報道されることになりました。

そんな中であろうことか、私たちの旅行が業者による、その方の接待に利用されたという記事が、高知新聞に掲載されたのでした。イタリア同好会・高知の名前が記載され、私たちの活動が県民の方に誤解されかねない内容で、この報道はとても残念でした。

それ以降、同好会企画主催による旅行はされていません。

駐日イタリア大使来高とそれに関連して

イタリア同好会・高知では、1994年と2017年の2回、駐日イタリア大使をお招きしての歓迎パーティーが開催されています。

2回目の大使来高の立役者は会員北村香奈江さんです。彼女は自転車レース事故で亡くなったイタリア人レーサーの遺族のために募金活動をしており、その活動を大使が知って、2016年に東京の駐日イタリア大使館で開催されたイタリア共和国建国記念日パーティーに彼女は招待されたのでした。その席でストラーチェ大使と面会し、高知に来てくださるよう大使に嘆願してくれた訳です。彼女は事前に大使が自転車でのサイクリングが好きなことをリサーチしていて、高知の魅力的なサイクリングコースの資料も渡してくれました。それが見事に当たり、ストラーチェ大使が高知県を表敬訪問して下さることとなった訳です。

この時は日程のトラブルがありました。当初、大使館からは9月29日の来高の連絡がありました。私たちはそれに向かって準備を整えていたのですが、9月8日になって急遽大使館から、10月6日に日程変更の連絡が入り、出席予定者への連絡や変更日程への出欠確認、再準備等で大変だったことを覚えています。

私は2回とも出席させていただき、両会ともに大使の前で演奏する名誉な機会をいただきました。

2017年の時はなぜかスロベニアの女性大使レスコヴァル氏も同行されており、宴たけなわスロベニア大使より私に再演奏のリクエストがありました。アカペラで「オー・ソーレ・ミーオ」を歌ったのですが、歌い終わるとレスコヴァル大使が私に向かって両手を広げてくださり、思わず二人でハグをしたのは、とても嬉しい思い出です。



レスコヴァル大使(白い服の女性)に向かって歌う私

2017年の大使来高のご縁から、その後東京の駐日イタリア大使館へ何回もご招待をいただき訪問いたしました。その訪問機会に、全国の日伊協会の幹部の方とも交流ができました。特に東京の日伊協会さんとは懇意にいただき、島田精一会長様には2019年11月の定例会に講師としても来高いただきました。

また大使来高を機に高知県国際交流課(現 文化国際課)とも交流が始まり、高知県が2024年4月に在大阪イタリア総領事マルコ・プレンチペ氏を高知に招聘した時は、県のご配慮で私たちに総領事との単独昼食会を持つ機会をいただきました。

ヴェネツィアからの留学生

ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学から高知県立大学へ短期留学してくる学生達との交流も楽しい思い出でした。東日本大震災やコロナウイルス感染の関係で中止になった年もありましたが、2022年まで確か10回以上も高知に来てくださり、定例会や会話教室で交流を深めることが出来ました。

2016年の留学生との交流は特に思い出深いです。

この年は私の発案で、会話教室のメンバーと一緒に寸劇を定例会で上演することになりました。中級クラスは「純心お馬」を上演しました。私は台本の作成と演出をして、また慶全役でも出演。台本はイタリア語と日本語で書きましたが、イタリア語のセリフはパオロ先生にかなり手直しされました。

日本人はイタリア語で、留学生は日本語(土佐弁)のセリフをしゃべる形式で、練習を会話教室でしました。

留学生のシルビアさんの喋る土佐弁がとても上手で、練習中に私は何度もお腹を抱えて笑ったことでした。

本番当日は五台山竹林寺の海老塚住職ご夫妻も観覧にお越しくださいました。

本当に楽しかった。あの時の留学生のことは今でも一番覚えています。きっと彼らも覚えてくれていると思います。残念ながら、ヴェネツィアからの留学生は2022年を最後に今後は予定がありません。

イタリアとの Zoom オンライン交流会

コロナ感染の間はつらかったです。留学生は来れないし、同好会自体も対面での定例会が開催できない等で本当に困りました。

そんな中、2021年6月、駐日イタリア大使館で知り合い懇意となった北海道の日伊協会さんから、今度イタリアのアブルッツォと Zoom によるオンライン交流会をしますけど参加されませんか、とのご案内をいただきました。

しかもテーマは私の大好きな「作曲家トスティとその歌曲の作詩家」でした。私は喜んで参加しました。

この交流会では、イタリアのトスティ研究者と文学研究者から色々と貴重な興味深い話を聴けました。交流会を経験して、私はこの Zoom を使ったのオンライン交流会は凄いツールだと感心しました。

イタリアに行かなくても、またイタリアから専門家を招かなくても、しかもたくさんの方が同時にオンラインで交流ができるなんて。

それなら、同好会でもイタリアの人たちと Zoom を使って交流を試みよう、と思い立った訳です。

私は早速イタリア語会話教室講師のパオロ先生に相談しました。そして、2021年10月にパオロ先生の尽力で彼の故郷フェレンティーノの友人お二人とのZoom交流会が実現しました。

ただこの交流会はイタリア同好会・高知開催としてではなく、イタリア語会話教室のメンバーのみの交流会となりました。この交流会の会話録音を後で私が何回も何回も聴いて書き取り、またパオロ先生に添削していただいて、会話教室のメンバーと書き取りを共有してみんなで翻訳をいたしました。

同時期にフィレンツェ在住のサポート会員横山明子さんにも交流会の話を持ち掛けていましたところ、11月に彼女のお世話で、3回にわたり知り合いの方との交流会が開催できました。参加された方の殆どは日本語が上手な人たちで、お互いに質問をしあったりして、気楽に楽しめました。

この3回も会話教室による開催でしたので、同好会のHPでは「勉強会」に内容が掲載されています。

2022年にも4月、6月、7月の計3回イタリアとのZoom交流会が開催されました。この内容は、HPの「定例会」項目に、Zoom交流会として掲載されています。

以降、コロナ感染の収束とともに、イタリアとのオンライン交流会は開催されていません。

オペラ「ラ・ボエーム」の上演

「30数年間の行事の中で一番の思い出は何ですか」と、もし尋ねられたとしたら、私は迷わず1997年に開催したオペラ「ラ・ボエーム」です、と答えます。

なぜなら、すごく大変だったし、そしてものすごく楽しかったからです。

このことを書いて私の思い出の締めくくりといたします。

1997年3月、私は香川県高松で、このオペラを香川県のオペラ仲間と上演しました。その時、当会の創設者である宮地彌典さんが観劇にわざわざ来てくださいました。

公演後、ちょっと経ってからです。宮地さんから私に、イタリア同好会・高知で、そしてラ・ヴィータホールで、あのオペラが上演できないか、との相談を受けました。

それに対して、私は「やらさせていただきます」と即座に返事をしました。ただそのためには大変な多くの課題があることは承知していました。しかし、私が愛してやまないイタリアオペラを高知で上演出来る、そのことが何よりもうれしく、またありがたいことだと思って即答したわけです。

その課題というか、私の心配だった点は、オペラの制作について経験しているのは私のみで、同好会の他の方にとっては未知のことであり、それで制作がスムーズに進むのかということでした。

オペラは舞台の表面で見えるところだけでなく、それ迄に必要な練習、準備、作業等が大変な総合芸術です。

今回の場合、まずは演奏面、一緒に歌った香川のメンバーが高知にまで演奏に来てくれるのか。また香川のメンバーで不足する役柄や合唱団(児童から大人まで必要)を高知で協力してくれる人物、団体を手配できるか。そして演出面、あの狭いラ・ヴィータホールの舞台を使ってどのように演出するか。

そして以上がクリア出来ても、今度は大勢の人との練習スケジュール調整、練習会場手配、衣装、舞台装置美術、小道具、照明プラン、メイク、日本語字幕原稿と字幕作成等の項目が待っています。

さらに告知に関するチラシ・チケット・プログラム作成・印刷、マスコミへの取材依頼、後援申請。

収支面では、チケットの販売、そしてチケット販売のみでは賄えない不足資金をどう調達するのか。

そういったことを一つ一つ解決していかなければなりませんでした。

ただそれらの課題に対し「同好会でオペラ上演をやり遂げるんだ」との目標のもと、会員のみならず、多くの方々が協力を惜しまずにご支援くださいました。結果、2日間の公演には延べ357人のお客様が来場という大盛況のうちに無事終了できたのでした。

なお、この時の思い出は、2004年2月発行の「BUONGIORNO 10周年特別号」でも書かせていただいておりますので、もしお持ちの方がありましたら、再度ご覧になっていただければ嬉しいです。

私は当時の、ご協力ご支援くださった全ての皆さんに、とても感謝しています。

そんな中、私が感謝しきれないのは、今は亡き家内です。

当時私は銀行に勤めていましたので、平日は仕事に従事しているために土日以外は全く実務的なことができませんでした。その上、土日はオペラの練習のため香川に結構行かなくてはならず(香川から高知に来てもらうとメンバーの交通費がかかるので)、高知を不在にすることも多々ありました。

その間のサポートを家内が献身的に、そしてそつなくやってくれた訳です。オペラをよく知り、私の意図を的確に理解して本当に色々と支えてくれたのは家内です。

はっきり言って、彼女なくして、オペラ上演の成功はありませんでした。

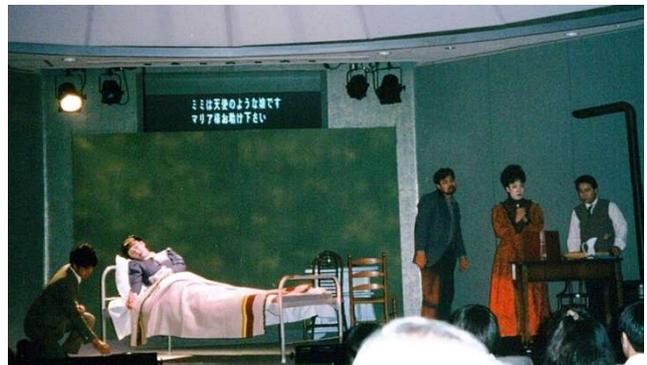
2014年から私は高知県内にイタリアオペラを根付かせたいとの思いから、声楽家仲間と一緒に県内でオペラを上演する活動をしています。コロナ感染等で上演を断念した時期もありますが、今年の6月にブッチーニ作曲「外套」を上演して、今までイタリアオペラを7演目公演しました。

私は出演するだけでなく、オペラ公演に必要なほぼすべての必要準備作業をやってきました。

そのことは、この「ラ・ボエーム」を上演した時の経験も大いに活かされていると思います。



オペラ1幕2場 テーブルと椅子はラ・ヴィータホール提供



オペラの終幕 ベッドは市内の病院から借りてきた

おしまいに

イタリア同好会・高知の30数年の活動は、イタリアの文化・料理・人々等に接し、交流してきた歴史です。

その活動実績により、駐日イタリア大使館や高知県からイタリアとの友好団体として認知され、高知県立大学からも頼りにされるようになりました。

私個人は同好会のお陰で、大好きなイタリアをより深く知り体験することが出来て、随分と楽しい思いをさせていただきました。

イタリアが大好きな皆さんが集うこの会が、どうかこれからも、活動を継続し、さらに色々と発展していくことを願っています。